



基肥施用量と‘カサブランカ’の「青地」(仮称)発生との関係



正常な花蕾



「青地」の生じた花蕾

写真 ‘カサブランカ’の正常な花蕾と「青地」の生じた花蕾

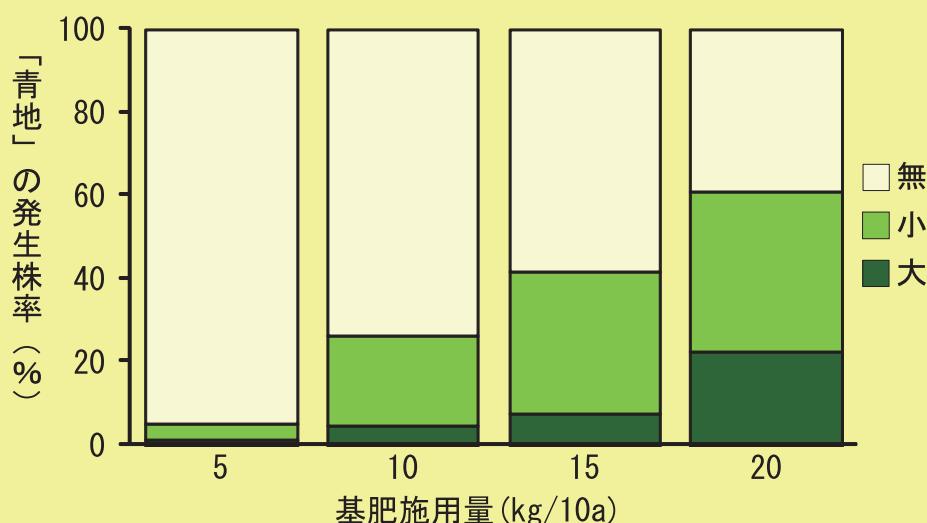


図 基肥施用量と‘カサブランカ’における「青地」の発生との関係

注) CDUS555を用いて、窒素成分を所定の量施用したほ場に、ニュージーランド産球根(球周22-24cm)を解凍後、13℃で2週間芽出し処理して10月20日に定植。最低夜温を発蕾までは13℃、発蕾後は15℃を下回らないように加温し、最高気温23℃を目標に強制換気。採花時に各株第1花蕾の着色程度を調査(無:症状なし、小; 明確な緑色で開花時にも色が残るもの、大; 濃緑色で蕾が変形したもの)。

発蕾以降の夜温を慣行の18℃より低くして‘カサブランカ’を栽培すると、採花適期になっても花蕾の基部に緑色残り、著しい場合には正常に開花しない「青地」といわれる症状が出る場合があります(データ略、写真)。切り花栽培農家では、十分に加温しても施肥量が多いと「青地」が発生することがあるとされています。そこで、基肥施用量が「青地」の発生に及ぼす影響について検討しました。その結果、比較的

「青地」が発生しやすい最低夜温15℃の条件下では、基準施肥量の5kg/10a区でも約5%の株で発生し、施肥量が多いほど発生が多くなりました(図)。

今回は追肥を施用せずに試験をおこないましたので、今後は、花蕾の肥大促進のために施用する追肥の量が「青地」の発生に及ぼす影響について検討する予定です。

(花き担当 二宮千登志 088-863-4918)